8 ブラックハウス

ブラック・ハウスといっても、外が黒く塗られた家ではない。スコットランドの高地地方やヘブリデス諸島で、古くから人々が住み続けてきた、小さな家のことである。煙突がなく、室内がススで真っ黒になるので、このように呼ばれてきた。

もともと、イギリスの住居は平面形が丸いものであった。スコットランドの北のほうに、シェトランドという島がある。アバディーンから船で 10 数時間かかるところで、むしろノルウェーに近い。この島は、犬好きの人には、シェトランド・シープ・ドッグの故郷ということで知られているらしい。それはともかく、そこにヤルショフという新石器時代の有名な遺跡があるが、そこの石造りの住居も円形で、鉄器時代になっても、やはり住居は円形である。ところが、このブラック・ハウスは平面が長方形だ。長方形といっても、角が少し丸くなるのが普通である。

どうやら、この長方形のブラック・ハウスの起源は、バイキング時代にあるらしい。北欧のバイキングの集落は、長方形の住居であったことが知られている。シェフィールド大学の、マイケル・P・ピアソンは、ヘブリデス諸島の南ウイストという島で、バイキング時代の集落の発掘を続けており、ブラック・ハウスの源流を明らかにしようとしている。

このヘブリデス諸島よりさらに西に、セント・キルダという小さな島がある。スコットランド本土から西に約 180 キロの、僻遠の島である。1930 年、本土に移り住むことを強いられるまで、この島の人々は、過酷な環境に適応した生活を続けてきた。もちろん、伝統的な住居はブラック・ハウスであるが、この住まい方がものすごい。

住居の壁は自然の石を積み重ねたもので、厚さは 1 メートル近くある。屋根は草葺きで、石の重しをつるして強風から守られる。窓がなく、外気は入り口からはいるだけである。この家の中に、人々は牛とともに住んでいた。牛の糞尿は、そのまま家の中に溜めておかれる。しばらくたまると、それを家中に撒き広げる。そして、草を焼いた灰を撒き、その上に土をかぶせ、泥炭をまぶす。

ブラックハウス風の建物 (1996 年 6 月 10 日撮影、北ウイストにて、著作権フリー)

この作業を何回かくり返し、床が 1.5 メートル近く高くなったところで春がきて、畑にこの肥やしを撒くのである。煙突がないのでススは家の中にたまるが、それもこの肥料に混ぜられることになる。家の中は糞尿の熟成で暖かく、煙は高いところに滞留し、生活空間はそれほど煙たくなかったという。それにしても、悪臭に極端に敏感な日本の若者には、想像を絶する生活である。

やがて、政府の指導もあって、新しいスタイルの住居が建設され、人々はブラック・ハウスを捨てた。しかし、新しい住居は寒く、暖房に多くの資源を使ってしまい、肥料づくりもうまくいきにくくなる。そして、穀物の生産が急速に低下し、結局、人々は島を離れざるをえなくなった。あまりに非衛生的にみえた、セント・キルダの人々の住まいも、じつは農耕と深く結びついた、それなりに合理的な生活だったのである。事実、この生活様式が守られていたころは、短い夏と度重なる嵐にもかかわらず、この島の穀物は他の地域より成長が良かったそうである。何千年も昔の新石器時代の人々の生活は、このようなものだったのだろうか。

スコットランド本土やヘブリデス諸島では、19 世紀になると住居に煙突が付けられるようになる。室内はススで汚れず、ホワイト・ハウスとなった。窓も

でき、住宅資材も変わったが、スコットランドやアイルランドでは、いまでもブラック・ハウスの伝統をとどめた形の家が多い。

1996　新納泉　　著作権フリー

【Info】セント・キルダ St. Kilda 57.814784,-8.584560
　ヤルショフ Yarlshof 59.869052, -1.290789

【付記】ヤルショフ Jarshof はもともと北欧の言葉で、Jarl（領主）の hof 家という意味であるが、イギリス流の読み方が定着し、現地ではヤルショフと発音されるようである。